



1_染料を生地になじませるため交代でかき混ぜる。 2_染めたての生地の色を確認 3_茶染めと川根本町を関連づけるマインドマップを作成 4_マインドマップ【お茶染め】からアイデアが広がる 5_商品案を鷲巢さんと西條さんに提案 6_緊張のテスト販売

高校生たちの 今を詰め込んだ 未来へのおくりもの



「僕たちは川根本町で生まれ育ったわけじゃない。でも、この町が大好きだから。二度と経験できない高校生の「今」という時間。5人の生徒たちは、そのかけがえのない時間をお茶染めプロジェクトとともに過ごしました。商品開発やテスト販売、販売先の拡大。1年間にわたった生徒たちの挑戦を追いかけました。

始まった商品開発

お茶染めプロジェクトから協力を相談された川根高校は、学校独自の教科「地生学」の授業の中で、生徒による商品開発や販売先の開拓などを通して、同プロジェクトに貢献できると考え、協力を決めました。
メンバーは3年生5人。全員町外出身の生徒です。入学当初から町内の寄宿舎で生活をしている鈴木康太さんは「慣れない生活を支えてくれた地域の人に恩返しがあった」と振り返ります。
6月、生徒たちは商品開発に向け、人生初のお茶染めを体験しました。鷲巢さんの指導に必死にこたえる生徒たち。「布一枚染めるだけでもこんなに大変なんだ」と物作りの苦労を思い知ります。

西條さんと鷲巢さんの 思いに込めたい

体験を経て、生徒たちは商品の試作に取り掛かりました。どんな物がいいのか川根本町とお茶染めを関連づけながら、「便利な物が良いよね」「SNS映えを狙おうよ」と意見を出し合います。なかなか考えがまとまらず議論が緩みかけたとき、指導教諭の豊島宏さんが語りかけました。
『デザインの話源には『設計』と『問題解決』が含まれている。西條さんと鷲巢さんの思いを踏まえた物をしつかりと『設計』して、川根本町の『問題を解決』する商品を目指す必要があるんじゃない。その言葉を聞いた生徒たちの顔に緊張感が戻りました。それから試行錯誤を繰り返して、町の木材を用いたコースターと川根本町の文字をオシャレにデザインした手ぬぐいを完成させたのです。

迎えたテスト販売 挑戦の先に見えたもの

「お茶で染めた手ぬぐいありまーす」
11月23日、観光客でにぎわう寸又峡に生徒たちの姿がありました。声を張り上げる生徒を横目を通り過ぎていく人たち。売れるのかと不安がよぎる中、最初のお客さんが現れました。「買ってこれてうれしい。商品に込めた思いもしっかり聞いてくれた」と金子巧さんは笑顔で話しました。
テスト販売を終え、商品のニーズを見直した生徒たちは、販売先の開拓に乗り出します。「目標は店頭に置いてもらうこと」。生徒たちは思いを一つに事業者にかけ合いました。反応は良好でしたが、その成果が実るのは来年度になるそうです。それでも高校生たちの1年間の挑戦は、川根本町の未来に確かな足跡を残したのです。

町に点在する様々な魅力を 高校生がつなぎ合わせ発信していく

川根本町に新しい産業を根付かせ、や行動が地域や事業者を動かす原動力になったと実感しています。今年目標は、商品を店頭にも置いてもらい、川根本町の魅力発信につなげることでしたが実現はしていません。ですが、5人の生徒たちが地域と深くつながり、川根高校と川根本町を結びつけて、実践してきた取り組みは、今後、高校と町が協働する足がかりになったと確信しています。



静岡県立川根高等学校
豊島 宏 教諭

商品やロゴマーク、小中学生の作品をもっと皆さんに知ってほしいと思い、ホームページを作りました。西條さんの思いや僕たちが商品に込めたこだわりも紹介しています。
僕は川根本町が大好きです。この町のために何かできることがしたい。そう思いながら過ごした1年間の集大成をぜひ見てほしい。そして、僕たちが考えた商品を1度手にとってほしい。きっと川根本町の魅力を肌で感じることができると思っています。（鈴木康太さん）



▶ホームページへはこちらのQRコードからアクセス



▲メンバーの生徒たち(左から深田 将吾さん 鈴木 康太さん 登澤 猛さん 金子 巧さん 長澤 匠海さん)